

8

のら猫クロッチと目があつて

ご縁ができたその日から そばに寄り添い 共に歩んで 同行二人

マリエレーヌ・ポワンソ

画家、写真家
料理研究家



©1997, 2017 NURUE

マリエレーヌ・ポワンソさんは画家、写真家、そして料理研究家でもある。

南フランス、ニース在住で、日本では2冊の料理の本が出版されている。東京で「プロヴァンス」南仏料理、フランス菓子の講座も開催している。日本語を完璧に話し、日本を理解し愛するマリエレーヌさん。競艇（ボートレース）に魅せられ、選手たちとの交流も深い。突っ走るのが大好きなオイラとそんなところで気が合うのかも。

『絵』も『日本』もわたしの心と魂の一部分。生きていくうえで必要不可欠の存在なのです。こう語るマリエレーヌさん

は、料理研究家としても活躍している。近年、「みんなが笑顔になるフランスの定番おやつグテ」（自由国民社）、「マリエレーヌのアイスクリームとシャーベット」（文化出版局）という2冊の本を出版した。「料理は幼いころからの趣味で、他人も自分も幸せにできる最も簡単な方法だと信じています」と微笑む。マリエレーヌさんにとって、料理とは友だちのために作るものなんだそう。

「3・11後、日本の方々を自分なりに支えたくて料理ブログを始め、気がつけば料理研究家になっていました」。本には、美しくておいしそうなスイーツの写真とレシピが満載だ。驚くのは、これらのレシピ考案、フードスタイリング、写真撮影全て

人生を変えた 「雪舟の水墨画」

「いつか日本へ行く」と直感したのは小学2年生の夏、「バイクで世界一周」という本で、東京の地下鉄について書かれた文を読んだ時のこと。「著者の日本への偏見に腹がたったことを

ハッキリと覚えています。日記帳に数ページも書いたほど怒っていました」と語る。その時は来日したことがないのに、不思議だよね。その2年後、絵を気に入られ薦められて通っていた画家のアトリエで、日本美術史の本をめくったマリエレーヌさんは、ある絵に魂を奪われた。雪舟の水墨画だ。見るやいなや魅入られてしまい「いつか必ず本物の雪舟を見に日本に行かねばならない」と運命を感じた。

「あの時、人生が一瞬にして変わってしまったの」。年月は流れ、今は年に2度、3度と来日し、京都を拠点に毎年3ヶ月ほどを日本で過ごすようになった。

競艇に魅せられて

もともと海辺の生まれ育ちで、歩けるようになる前にボートに乗っていた。ボート（船全般）やボートレースが大好きだというが、「息をするのさえ忘れるほど感動できるのは競艇（ボートレース）だけです。最初、ギャンブルであることを知らなかったことが幸いでした。偏見を持たずに自然に感動できましたから。そして選手を心から尊敬できたのです。

マリエレーヌさんは、競艇選手たちとの交流も深く、来日のたびに競艇場に通って、選手たちの肖像やボートの絵を描いてきた。

「人や動物などの動くものこそ、写真より絵のほうが対象に忠実なのだ」とマリエレーヌさんは考えている。



Marie-Hélène Poinso

著書「みんなが笑顔になるフランスの定番おやつグテ」（自由国民社）「マリエレーヌのアイスクリームとシャーベット」（文化出版局）HATTORI キュイジーヌクラブ LUNA LAPIN にて南フランス料理、フランス菓子講座を開催。
公式サイト「マリエレーヌの世界」 <http://www.lemondedemariehelene.wordpress.com>
Facebook <https://www.facebook.com/gouterdefranceaujapon>

だけでなく、女性も子どもを養うために選手になり、それで助けられた家庭が少なからずあったことを忘れないでいただきたいです。日本人が日本人のためだけに考えたスポーツで、最初の内はある種の不況対策でもあった競艇はもちろん時代とともに変わり、今の《ボートレース》になったので、これからはどうなるのかすごく気になります。とにかく、描き続けられれば人間としても画家としても本望です」「わたしの愛するボートレースは、日本の方々が想像するものとはかなり違うといえますが、奥深さも人間味もあり、『ギャンブル』とは関係のない、その純粋な感動と敬愛の気持ちをわかってあげればと思うのです」

日本のことを フランスに伝えたい

東南フランスという土地で、女性でありながら『日本語を勉強する』『絵描きになる』という二大禁忌を犯したわたしは、親戚たちに受け入れてもらえず、疎遠になったことが一番こたえました。でもみんなに理解してもらえるようにと時間をかけて日本の良さを伝えていこうと努めています。基本的には自分の

勘を信じ、地道に頑張ることがベストなのだと思信じています。

「偉そうに聞こえるかもしれませんが、フランスで日本を語ることができて、日本でフランスを語ることができることを光栄に思い、これからも両文化間の橋渡しになれるように頑張っています」

自分を動物に例えるなら

「理想は猫かなあ、狐もすごく好きですけど、日本ではイメージがあまりよくありませんね。それに『葛の葉』があまりにかわいそうで……うん、あれは悲しい話だね。

「クロッチの目つきの悪さに一目惚れしました。みなさんに聞いていただきたいメッセージに深く心をうたれたのです」。マリエレーヌさん、ありがとう！オイラのこと、すでにフランスに紹介してくれている。

「クロッチ、ごちそう作るからうちにおいで！」

「もちろん、喜んで！」

■マリエレーヌ・ポワンソ (Marie-Hélène Poinso)
フランス、ニースに生まれ育つ。画家、写真家、翻訳家、通訳、料理研究家などの顔を持つ多才な芸術家。